



Title	<図書紹介>ジョン・ペンフォールド著 織田芳人訳 「クラフト デザイン テクノロジー」玉川大学出版 部1993
Author(s)	日野, 永一
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 107-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52984
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジョン・ペンフォールド著 織田芳人訳

「クラフト—デザイン—テクノロジー」

玉川大学出版部 1993

日野永一／兵庫教育大学

書名からは、これら3者の関係についての歴史的・哲学的考察かのように感じるが、この「クラフト—デザイン—テクノロジー（略してCDT）」とは英国の中等教育の中で実施されている教科の名称である。米国の「インダストリアル・アーツ科」、日本で言えば「技術科」に相当する教科であろうか。

1851年の万国博において産業革命の成果を誇った英国であるが、その後は工業の衰退が目につくようになった。その原因は技術教育の欠如にあるとして、労働者階級の子どもたちに対する手工教育の導入が論議され、8回もの法案提出の末ようやく技術教育法が議会を通過したのは1889年のことである。しかもその普及は順調なものではなかった。例えば職業教育の意味を持つ実用教科であるため他の教科に比し低い地位に置かれたり、教員養成の問題—初期には実技教師として熟練した職工が採用された—等々。またスロイド教育（スウェーデンで創始された手工芸教育。日本の工作教育も影響を受けた）や、モリスらのアーツ・アンド・クラフツ運動の影響も強く受けた。さらに現在では女子生徒や女性教師への機会均等も、大きな課題となっている。

読み・書き・算盤という実用的な目的から始まった教育ではあるが、現代の学校教育では単なる知識・技能だけでなく、それらを通して人間形成を図るところに大きな意味があるとされる。しかし公教育においては、当然社会人としての準備をなす実目的（職業教育も含めて）や、国としての発展を図る方針の影響も受けざるを得ない。先進国では産

業の空洞化が問題となっているが、日本でも最近理工系学生の拡充が叫ばれているように、英国病を克服するための一つ的手段として技術教育が見直されている。

日本と異なって伝統的に各学校の自主性を重んじてきた英国の教育であるが（例えば芸術関連教科では、各学校の判断によって美術、音楽、演劇、舞踏などが設置されている）、ここ数年来保守党政権により教育投資的な性格を持つ「ナショナル・カリキュラム」の導入の動きが活発となっている。そこでは理数系・産業技術教育の優先が図られているが、デザイン教育について見ると技術教育に重点を置く上記「CDT」と「美術」との双方に含まれ、緊張関係も続いているようである。

日本でも1960年代の技術・家庭科発足の頃には、図画工作科の工作が移行されたこともあって、「技術科」の内容にデザインが含まれていたのだが現在は消えている。本書は世界的な教育変動の動向を知る一つの資料となり得よう。

著者は長らくCDT教育に携わってきた人、訳者は長崎大学に勤務する本学会の会員。訳文そのものは理解を妨げるところがないが、日本の一般の読者にとっては英国の教育制度が頭に入っていないとその本意が理解できない部分が多い。訳者による英国の教育制度の簡単な解説が付されていたなら、一層有意義なものとなっていたらう。